

に怒った周の武王が仙人の助けを借りて義挙し、新しい王朝を樹ち立てる。歴史を動かすのは、生産力とか生産関係とかいう七面倒臭いものではなくて、単純明快に魔術だということになっていく。とにかく恋愛あり、セックスあり、ちゃんばらあり、妖怪変化あり、残酷物語ありで実に楽しい観劇であった。

「鳳鳴岐山」には紛う方なくロシア・バレエの影響がある。私はとりわけハチャトゥリヤンの「スバルタクス」を想い出した。この作品は、スターリン主義時代のものながら娯楽性に富んでいる。灰色一色の五〇年代のモスクワで「スバルタクス」のエロチックな場面が唯一の息抜きだった、と西側の外交官が回想しているぐらいである。おそらく五〇年代にソ連に留学した舞台監督やダンサーが「鳳鳴岐山」の演出を手がけたのだろう。そういえば昨年暮日本を經由してアメリカに亡命した著名なソ連の舞踊家親子が、中国に振付け指導に招かれた、という話を新聞で読んだことがある。おそらく、中ソ関係が断絶して以後のソ連バレエの新しい発展も、この亡命者を通して吸収することが出来たに違いない。

もちろんロシア・バレエの丸写しというのではない。たとえば、剣戟場面が多く、迫力に富んでいるのは中国独特のものである。おそらく京劇の伝統だろう。また華麗な色彩の演出も他に例を見ないものである。中国といえば、水墨画を想い出しがちであるが、同時に建物や彫刻の塗装に見られる極

中央公論 一九八四年十一月十一日

中国のなかのロシア

— 旅行者の眼で文化継受のあり方を探る —

文化は自由な人間に支えられてはじめて育つといわれるが中国に這入り込んだロシア文化はいかなる運命を辿ったか

北京のロシア民謡

大陸性の太陽がかんかん照りつける。人々はゆらゆらと燃え上がりそうな街頭を、喘ぎ喘ぎ足を運んだり、自転車漕いだりしている。また六月の半ばだというのに、外気温はもう摂氏三十五度だ。十二年前にはじめて訪れたモスクワの夏を想い出す。あの時も猛烈に暑くて、私は街頭を歩きながら、自分がこのまま蒸発してしまうのではないかと不安に襲われた。

北京の夏は暑いと聞いていたが、これほどとは思わなかった。しかし、しばらく街頭を歩いていると、日本本土の暑さ

彩色の世界もある。その他中国的モチーフがストリー、衣装、舞台美術等にふんだんに盛り込まれている。しかし、コレオグラフィや音楽の基本は、やはりロシア・バレエである。ロシア・バレエと民族的モチーフの結合は、ソ連の民族共和国の舞台にしばしば見られる。「鳳鳴岐山」も、それが見事に成功した例といえるのではなからうか。

考えてみると、既成の解釈に挑戦するような質問や大胆な芸術表現の試み——いずれも中国的基準に照らしてみても、という限定つきであるが——に出喰わしたのは、主として上海であった。上海という大都市には、そうした開明精神を生む土壌があるのかも知れない。上海で経験したことを中国全体にあてはめて考えることは、戒めなければならぬ。それにしてもそうした開明精神がロシア文化に対する深い理解を媒介にして育っているのを見るのは、心楽しいことであった。

異文化との接触は人間を自由にするといわれる。しかし、それは異文化の技術面のみではなく、また精神面をもわがものにしようとする態度がある場合にだけだろう。文化は自由な人間に支えられてはじめて育つ。中国に這入り込んだロシアも、このような意味で中国文化の発展に貢献していると思われた。

「追記」「燎原の火」という言葉の由来と毛沢東におけるその由来について、中嶋嶺雄氏から貴重な示唆をたまわった。ここに記して感謝の意を表したい。



伊東孝之

(北海道大学教授・国際関係論)

とは違うことに気がつく。私は札幌に住みついて九年経つ。出発前に一番心配したのは、日本本土のモンスーン性の湿気に大陸性のあの暑熱が加わったら、一体どうなるだろう、ということであった。しかし、現地に着いてみると、それは杞憂であることがわかった。

北京には梅雨がない。華北はモンスーン地帯に属してないのだ。カラッと晴れて、モスクワ以上に乾燥している。たしかに暑い、汗はすぐ乾いてしまう。私は、北欧の人間が地中海の太陽に憧れるように、いつの間にか好んで陽光の中に浸り、暑熱を楽しむことを覚えた。夕方がまた日本本土と異なる。赤い夕日が地平線の彼方に沈む頃、気温が急に下がると。そうした夕刻にはビールが格別うま、油濃い中華料理